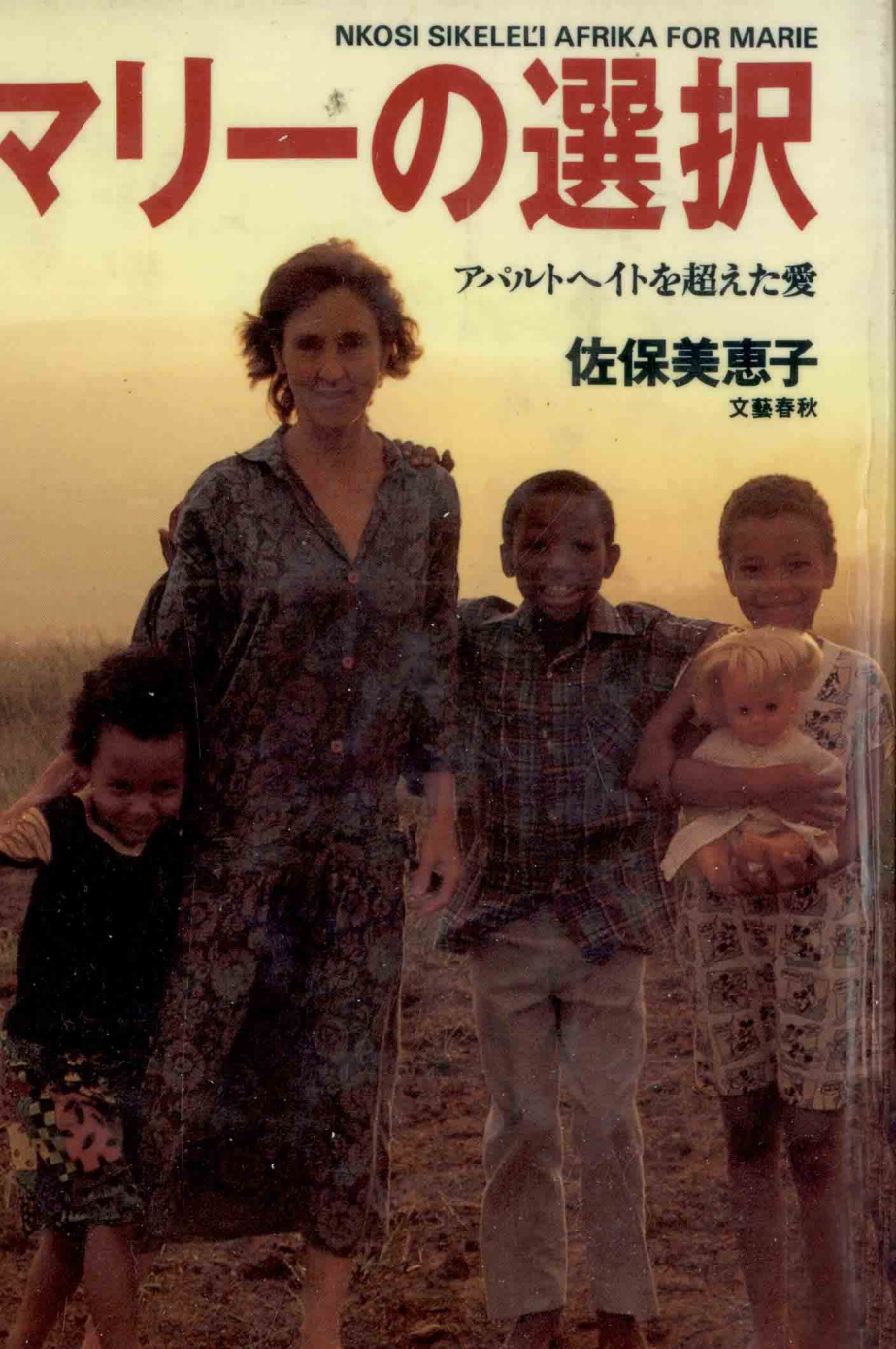
NKOSI SIKELEL'I AFRIKA FOR MARIE

マリーの選択

アパルトヘイトを超えた愛

佐保美恵子

文藝春秋



マリーの選択

アパルトヘイトを超えた愛

佐保美恵子

文藝春秋

佐保美恵子（さほ・みえこ）
1958年生まれ。大分県出身。学習院大学文学部卒業。ファッション雑誌の編集者などを経て，フリーライターに。1988年より1994年まで計5回，通算約400日にわたって南アフリカ共和国を取材。現在は雑誌のほか，8ミリビデオの取材で映像記者としても活躍中。

マリーの選択
アパルトヘイトを超えた愛

一九九四年五月一日　第一刷
一九九四年七月三十日　第二刷

著者　佐保美恵子
発行者　堤　堯
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）三二六五―一二一一
本文印刷所　理想社
付物印刷所　凸版印刷
製本所　矢嶋製本

定価はカバーに表示してあります。
万一、落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替致します。小社営業部宛お送り下さい。

© Mieko Saho 1994 ISBN4-16-348510-4 Printed in Japan

マリーの選択　目次

プロローグ　南アフリカへ　7
第一章　マリーのおいたち　35
第二章　ロミオとジュリエット　63
第三章　父親ぬきの出産　87
第四章　非常事態宣言の下で　115
第五章　希望をかけた再出発　131
第六章　新時代を告げる結婚　149
第七章　運命の七月七日　173

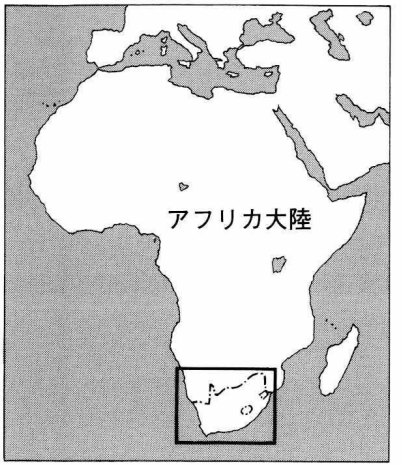
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

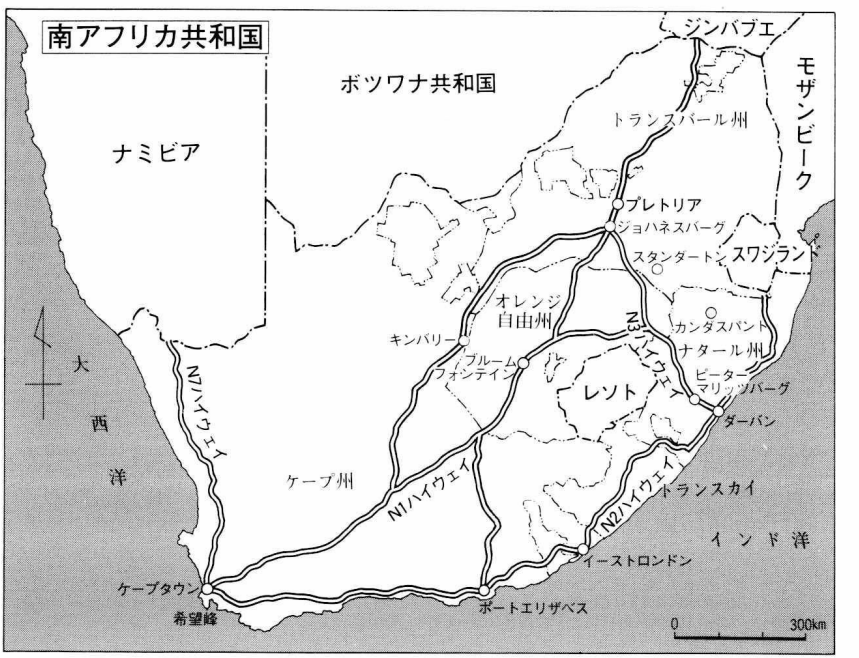
第八章　子供たちを抱えて　185
第九章　逃亡の地に夫を訪ねて　211
第十章　自由への賭け　245
第十一章　家族の不協和音　261
第十二章　前進のとき　283
エピローグ　ザンディーレ　297
あとがき　306

装幀　平林育子
カバー写真撮影　佐保美恵子
地図作製　千秋社

マリーの選択

アパルトヘイトを超えた愛


アフリカ大陸


南アフリカ共和国
ボツワナ共和国
ジンバブエ
モザンビーク
ナミビア
トランスバール州
プレトリア
ジョハネスバーグ
スタンダートン
スワジランド
オレンジ自由州
カンダスバント
ナタール州
キンバリー
ブルームフォンテイン
N3ハイウェイ
レソト
ピーターマリッツバーグ
ダーバン
大西洋
N7ハイウェイ
ケープ州
N1ハイウェイ
トランスカイ
N2ハイウェイ
インド洋
イーストロンドン
ケープタウン
希望峰
ポートエリザベス
0
300km

プロローグ　南アフリカへ

大地が闇の底に沈んでいる。外は嵐だ。フロントガラスの上では、激しい雨足をせりのけようと、ワイパーが必死にもがきつづけている。遥か彼方で、稲妻が次々と連鎖するように走り、真っ暗な空を容赦なく切り裂いていく。その瞬間、サバンナの向こうに山々のシルエットがパッと浮かび上がり、また夜の闇に吸い込まれていった。

一九八九年一月五日、私たちの車は南アフリカ・ジョハネスバーグを目指して、N3ハイウェイを北上していた。窓に打ちつける横なぐりの雨を見つめながら、私は今しがた別れたマリー・オーデンダールのことばかりを考えていた。

アパルトヘイトの国で黒人と恋に落ち、彼の子供を産み、次々とふりかかる困難に必死で立ち向かっている白人女性。「政治犯」、「獄中生活」、「不法居住」、「亡命」……、日本での私の生活では、決して耳にすることのない言葉。彼女の口に上ったそんな言葉の数々が、頭の中をぐるぐると駆けめぐり、荒れ狂う風雨と相まって、私は半ば夢でも見ているような気分だった。それにしても、別れ際のマリーのひとことが気にかかる。

「もしもいつか、あなたに再会できたとしても、その時、私たち家族はどこでどうなっているか……」

ほっそりとした腕で三歳のひとり息子を抱いたまま、そう呟いた時、彼女の頬を涙が伝って落ちた。目を閉じるとマリーのブルーの瞳、短いブロンドの髪、どこか心細げな表情が瞼の裏に浮かんでは消え、また浮かび上がってくる。偶然に出会い、たった数時間話をしただけなのに、彼女のことがもう心にべったりと貼りついて離れない。

マリーの姿と自分の過去の出来事が、脈絡のないまま重なり合い、次第に頭の芯が朦朧(もうろう)として

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

くる。次の瞬間、瞼の裏が不意に明るくなったかと思うと、地響きのような雷鳴が轟いた。思わず目を開け、窓にそっと頬を押しつける。

私はきっと、また、マリーに会いにやって来る――。

ガラス越しにアフリカのひんやりとした雨を感じながら、決心とも予感ともつかぬそんな思いが、心の奥からゆっくりとせり上がってくるのがわかった。

南アフリカに行ってみたい。

私がそう思い立ったのは、一九八八年九月、旅先のニューヨークで観た反アパルトヘイトのミュージカル『サラフィナ！』がきっかけだった。反アパルトヘイトといっても、それまでの私は、人種差別反対運動や人権問題には全くといっていいほど縁がなかった。むしろそうした社会問題とはかけ離れた、ファッションの世界に足を突っ込んでいた。

意欲的に仕事に取り組み、いくつかの恋も経験し、何不自由ない毎日を送っていても、ある日、何かの拍子でふと将来が見えてしまうことがある。自分の生き方が色褪せた、つまらないものに思えてくる。退屈で平凡な人生をなんとか変えたい。けれど何をどうしたらいいのかわからない。ニューヨークに旅立った時の私は、多分そんな心境だった。

ただ今思えば、何かを変えたいと意識しはじめたのは、その五年ほど前の二十代半ばあたりからだったような気がする。当時、私はあるファッション雑誌の駆け出し編集者として、ファッション撮影のアシスタントや、コレクションの取材などに追われていた。一見華やかな世界は最初の頃こそ刺激的だったものの、一年も経つとファッションの仕事は自分には合わない、と思いは

じめた。

そんな中、夏のある暑い日、私はホテルオークラで開かれたパリのデザイナーのコレクションを取材に行った。冷房が心地よく効いた会場に、リズミカルなＢＧＭが流れてショーがはじまる。ライトアップされたステージには、斬新なファッションに身を包んだ外国人モデルがひっきりなしに登場し、客席に向かってさりげなくポーズをとる。ステージの下で構えている大勢のカメラマンが、先を争うように一斉にシャッターを切る。何度も見慣れたきらびやかな光景が、その日は無性に虚しく映った。コレクションが終わると、私は重苦しい気分で会場を出た。

ホテルオークラの裏手を通り、地下鉄の駅に向かって坂道を下っていく。途中、小さな自動車修理工場がふと目にとまった。むせかえるような暑さの中、ジャッキで持ち上げた車の下で、つなぎ姿の青年が黙々と作業をしている。それは坂の上の世界とは対照的な光景だった。けれど私はオイルと汗にまみれて働く彼の姿に、いいようのない親しみを感じていた。その時、ファッションは自分の求めている世界ではない、とはっきり自覚できた。

それからまもなく、私はファッション雑誌の仕事をやめ、契約社員として編集プロダクションで三年働いた後、友人に誘われて代官山のワンルームマンションで、小さな編集事務所をはじめた。仕事内容は一般雑誌やＰＲ誌の企画・編集から、広告のコピーライティングまでと多岐に亘った。

収入は二十万円そこそこと多くはなかったが、友人のつてで仕事に事欠かないのがなにより安心だった。当時の私には、まだフリーで自活できる自信などなかったからだ。けれどやがてその友人との間に仕事に対する意識のずれを感じ、二人ではじめた事務所からも、わずか一年で手を

引いてしまう。

同じ頃、プライベートの方でも、私は大きな問題を抱え込んでいた。六年間付き合ってきた恋人との関係が、抜き差しならない状態に陥っていたのだ。十二歳年上の彼はある雑誌の編集者で、妻子もちだった。いわゆる不倫の恋である。

私たちの間では一時、結婚話ももち上がったが、結局二人とも答えを出さずじまいだった。ずるずると中途半端な関係がつづくうちに、妊娠した子供を諦めるというやりきれない体験もした。不本意な生き方に潔く区切りをつけたいと思いつつ、一方で孤独な暮らしに戻るのが怖かった。

行き詰まった現実に言いようのない疲労感を覚え、一九八八年の夏の終わり、逃げるように一人でニューヨークに旅立った。環境を変えて、じっくりと自分の将来を考え直してみたかったのだ。三十歳の誕生日を迎える直前のことである。

「『サラフィナ！』っていう南アフリカのミュージカルが今、ニューヨークで話題なんだって。観に行ってみない？」

現地で落ち合った日本からの友人に誘われて、ある夜、私は彼女とブロードウェイの小さな劇場に足を運んだ。

七割方埋まった客席は、圧倒的に黒人客だ。トランペットのソロとともに、開幕を告げるバンド演奏がはじまる。やがて弾けるような歓声とともに、私たちの前に飛び出してきたのは、黒い制服姿の四十人ほどの若者たちだった。

訛の強い英語のせりふ、初めて聞くズールー語の美しい歌声、若さがはち切れんばかりのダイナミックなダンス、役者たちの褐色の肌から飛び散る汗、生き生きとした表情……。私はあっと

いう間に、ステージに引きずり込まれてしまった。

ストーリーは一九七六年に南アフリカで実際に起こった、高校生たちによる反アパルトヘイト運動、ソウェト蜂起（第一章に詳述）がモチーフになっていた。明るく賑やかな授業風景、軍や警察による乱暴なボディチェック、警察の発砲、バタバタと倒れていく学生たち、鎮魂歌の中で行われる犠牲者の葬儀……。息つく間もなく繰り広げられていくシーンが、身震いするほどのインパクトで迫ってくる。演技を越えた、若者たちの本気が怖いほど伝わってくる。

舞台がはねても、私はしばらく席を立つことができなかった。役者たちの汗と熱気の残るステージを前に、ただわけもなく涙が溢れた。

人種差別が公然と罷（まか）り通っている南アフリカ共和国とは、一体どんな国なのだろう。もし悲惨な状況が今もつづいているとすれば、逆境の中のあの若者たちは、なぜあんなに生き生きと輝いていたのだろう。彼らの生きている社会を実際に見てみたい。そこには何か、自分が探しているものがあるかもしれない。その夜、私はかつてなく興奮していた。

劇場を出ると、大通りにはピンクや黄色のネオンサインが瞬き、レストランやバーの前では若者たちが溢れ、夜のブロードウェイは怪しく蠢（うごめ）きはじめていた。次々と押し寄せる人波をかき分けながら、私は何か満たされたような思いで、ただ黙って歩きつづけた。

帰国後の十月のある日、私は東京・新宿の喫茶店で、ニューヨークで落ち合った友人とともに二人の男性と向き合っていた。『サラフィナ！』を観て以来、顔を合わすたびに「南アフリカに行きたい」としつこく繰り返す私を見かねて、友人は現地の黒人居住区を訪ねるという男友だちを紹介してくれたのだった。

その一人がのちに私とともに、南アフリカの取材にのめり込んでいく写真家の奥野安彦である。奥野たちは半年ほど前、仕事で訪れたオーストラリアで『サラフィナ！』と同じ劇団による演劇『アシナマリ！』を観たのだという。彼らはその芝居の迫力と役者たちの生き生きとした姿を、熱のこもった口調で語りつづけた。

その上、『アシナマリ！』は二人の紹介で、四カ月後の一九八九年二月に日本公演が決まったらしい。役者たちが来日する前に、演劇の社会背景を自分たちの目で見ておきたい、というのが彼らの南アフリカ行きの理由だった。

「出発は二カ月後の十二月中旬。固い話は抜きにして、とにかくぼくらといっしょに南アフリカに行ってみようよ。きっとおもしろいと思うよ」

ドイツ製の一眼レフ「ライカ」をさも大切そうに撫でながら、奥野がたたみかけるように言った。

「行こうって簡単に言うけど、どんな国かもわからないのに……」

口ごもりながらも、私の心は南アフリカへの旅に大きく傾きはじめていた。

アパルトヘイトの国、政情不安定な国――そんな土地に赴くというのに、奥野はリゾート地にでも行くかのようにあっけらかんとしている。彼のその無頓着さが、むしろ私を安心させた。頑丈そうな男が二人もついていれば、ボディガード兼ドライバーにもなるし、女の一人旅よりははるかに心強い。

でも仕事はどうするのか……。当時、フリーライターとして独立したばかりの私は、帰国後の生活を考えるとやはり不安だった。けれどこのチャンスを逃せば、自分は一生、後悔するような

気もした。
「きっとおもしろい」
奥野の何気ないひとことが、決め手になった。何もしないで後悔するより、たとえ失敗に終わっても、まず行動してみる方がよほど価値がある。そう思った時、私はもう南アフリカ行きを決めていた。
演劇の社会背景を見てみたい、という私たちの単純な思いに反して、南アフリカ共和国は何やら厄介な事情のある国らしい。そう実感したのは黒人居住区の話を聞くために、ＡＮＣ（アフリカ民族会議／AFRICAN NATIONAL CONGRESS）の東京事務所に、ジェリー・マッツィーラ代表を訪ねた時だ。
「当然、ご承知のこととは思いますが、この事務所にいらしたことは向こうではもちろん、日本でも不用意に喋らないように。あなたたちの南アフリカ行きの情報が、どこから漏れるかわかりませんから。なにしろＡＮＣは、現地ではまだ非合法組織なんです」
マッツィーラ氏からいきなりそう切りだされて、私たちは思わず顔を見合わせた。単なる観光旅行ではなく、黒人居住区を訪ねて黒人たちのなまの声を聞きたい、というのが今回の旅の目的ではある。けれど情報が漏れるとか、秘密にしろとか……。それではまるでスパイ映画のような話ではないか。
「現地での行動は、何者かに監視されていると思った方がいい。『ＡＮＣ』という言葉は、人前で絶対に口にしないこと。反アパルトヘイト関係の本や資料は、一切持ち込まないこと……」
マッツィーラ氏は真顔で淡々と忠告した後、私たちに電話番号を走り書きした小さなメモ用紙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com